

大学生のいじめ加害傾向についての考察 ——性格特性5因子と家族機能に着目して——

渡 邊 杏 沙

臨床心理学研究 東京国際大学大学院臨床心理学研究科 第14号 抜刷
2016年（平成28年）3月31日

大学生のいじめ加害傾向についての考察

—性格特性5因子と家族機能に着目して—

渡 邊 杏 沙

要 約

いじめという現象は、日々メディアなどで重要な問題として取り上げられており、今日に至るまでに捉え方や形態が多種多様化している。その中で、「直接的いじめ (direct abuse)」「関係性いじめ (relational abuse)」に焦点を当てた研究がある(大西・吉田, 2010)。本研究においては大西らの考えを参照し、大学生347名に対して、いじめ加害傾向と性格特性及び家族機能との関連を調査した。その結果、直接加害・関係性加害の両いじめ加害傾向が高い傾向にある参加者はいじめ加害傾向が低い参加者と比較し、怒りっぽく、自己中心的であるといった性格上の特徴があるということが示された。また、兄弟姉妹の有無などが加害傾向に影響を与えている可能性が示唆されたうえ、男性参加者のみではあるものの家族機能において適応性が高いと直接加害傾向を強め、低いと関係性加害傾向を強める可能性が示された。以上から家族関係がいじめ加害傾向に影響するという結果が得られた。

I. 問題と目的

1.1 はじめに

いじめは1980年代ごろから社会的な問題として取り上げられ、被害者の自殺につながるような深刻なケースも見られる。近年において

は、「いじめ防止対策推進法」が制定されたり、いじめ報告件数が大幅に増加していることが明らかになっている。また、国立教育政策研究所(2013)の調査は、加害者・被害者の立場などを限定しなければ、いじめに関わっている小中学生は非常に多いという事実を示している。このようなことから、今日においていじめという現象が益々、軽視できる問題ではなくなっていることがわかる。

また、いじめは、社会的に問題視され始めた1980年代から現代に至るまでに捉え方が変化し、形態も多種多様化している。その中で、大西・吉田(2010)は「直接的いじめ (direct abuse)」と「関係性いじめ (relational abuse)」に焦点を当てた研究を行った。「直接的いじめ」とは、言語的攻撃、身体的攻撃、物理的攻撃などを手段に、加害者が被害者に直接危害を加えることで苦痛を与えるいじめであり、「関係性いじめ」とは、無視や仲間外れなどの関係性攻撃を手段に、加害者が被害者の対人関係に危害を加えることで苦痛を与えるいじめである。SNSなどのコミュニケーションツールが発展するにしたがって、いじめの手段が増え、従来のような「殴る・蹴る」「相手の陰口を言う」といった単純かつ直接的ないじめだけではなくてきている。そのため、昨今はいじめ問題について考えていくにあたって、直接的に相手に危害を加えるいじめであるか、対人関係に働きかけるいじめであるかということを区別して理解していくことが重要だと言えるだろう。

*臨床心理学研究科 博士課程(前期)2014年度修了 臨床心理学

そもそもいじめの定義とは、どういったものであろうか。いじめについては様々な人物・機関が様々にその定義をしているが、代表的なものとして、文科省の「①自分より弱い者に対して一方的に、②身体的心理的攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているものであって、④学校としてその事実(関係児童生徒、いじめの内容等)を確認しているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わないものとする。」という定義がある。しかし、尾木(2007)は、この定義にはいくつもの問題点があると疑問を投げかけており、「いじめ」とは、いじめられた被害者側が「いじめられた」と感じたら、それは即いじめであると定義し、決定している。

また、森田・清永(1985)は、「同一集団内の相互作用過程において優位に立つ一方が、意識的あるいは集合的に他方にたいして精神的・身体的苦痛を与えること」と定義しており、この定義に対して滝(1992)は「これは他の問題行動から“いじめ”行為のみを区別する上で必要な条件づけを行い、かつその原因や背景をいわずらに限定しない点で、とりわけ調査研究における“いじめ”行為の定義として優れている(p. 371)」と述べている。本研究においては森田・清水(1986)を参考に大西・吉田(2010)が定義した「同集団内の相互作用過程において優位に立つ一方が、意識的にかつ集合的に他方に対して精神的・身体的苦痛を加える行為」という定義に沿って研究を行う。

いじめ生起の要因に関して、様々な調査がなされてきた。滝(1992)は、いじめの発生要因について、性格原因仮説・機械原因仮説・不適応仮説の3つを定義し、実証的研究を行った結果として、不適応仮説が最も有力であり、性格原因説があまり有力ではないことを示唆した。また、国立教育政策研究所(2013)によるいじめ追跡調査では、「いじめられっ子(いじめられやすい子ども)」「いじめっ子(いじめやすい子供)」というものはなく、誰しもがいじめに関わる可能性があるということがいわれている。さらに、加野(2011)はいじめ被害者・加

害者の立場が入れかわりやすいとされる意見から、いじめ被害者・加害者に特定の特徴が存在すると仮定すれば、被害者と加害者の関係は固定されているはずであると、性格原因説を否定している。しかしながら、遊間(2014)の性格要因を加味した研究によれば、性格要因がいじめ加害に関連する可能性が否定できないということが明らかになった。このことから、いじめと個人的な要因(性格や家庭環境)が影響する可能性は十分にあると言える。また、尾木(2007)もいじめを解決するための根本的な考えとして加害者へのアプローチが重要であることを強調している。以上のことから、いじめ問題を考える際に、発生要因として加害者側に着目し、さらに個人内要因について検討することは必要不可欠なことであると言える。

1.2 いじめと性格特性

いじめ加害者になりやすい人物の特性については、これまで様々な研究がなされてきた。雨宮・水谷(2011)の研究ではいじめ加害者と嘲笑嗜好との高い関連性を示した上で、嘲笑嗜好が怒り特性に影響を受ける可能性を示し、そのことによって、いじめ加害者が怒りの特性を持っている可能性を示唆した。また、鈴木・田口・田口(1993)の研究は、いじめ加害者・被害者の特性における調査において、一般的に加害者の特性は「自分にやさしい」「冷たい」「心が狭い」「わがまま」「目立ちたがり」などと認知されやすいことを挙げている。さらに、攻撃性が高い(廣井, 2002)、他者軽視傾向や自尊心が高い(松本・山本・速水, 2009)などの特徴がこれまでの先行研究で述べられてきた。また、いじめ加害傾向と関連するとされる心理特性を持つ参加者のパーソナリティ傾向を全体的に理解しようとした研究では、いじめ加害傾向と関連が見られる他者軽視傾向と情緒不安定性の間に正の相関が認められる(速水, 2011)などがある。このように、いじめ加害傾向と密接に関連しているとされる心理特性と性格5因子との関連を示す研究については行われてきた。

しかしながら、このように人間の特定の心理特性といじめ加害との関連性についての研究やいじめ加害傾向と関連するとされる心理特性を持つ参加者のパーソナリティ傾向を把握しようとする研究はなされてきたものの、いじめ加害者のパーソナリティを包括的に理解しようとした研究は非常に少ない。

今日では、人の基本的性格特性は5つの特性であらわすことができるとする5因子モデルが一般的である。そこで、いじめ傾向と性格特性5因子との関連を明らかにすることはいじめ加害者自身の特徴やいじめを生起させる要因を探ることにつながると考えられる。

1.3 いじめと家族関係

いじめ生起の要因についても多数の意見があり、対人関係(教師・友人など)など、様々考えられているが、加野(2011)は、今日では食事を家族でバラバラに食べる「個食(孤食)」は珍しくなく、1983年の松田勇作主演映画『家族ゲーム』の1シーンで描かれている“横一列の食事風景”はそれを象徴していると述べている。また、映画が公開された1983年といえば、「いじめ問題」が注目され始めた時期であり、それは偶然ではないように感じるとも述べ、核家族化による家族関係の希薄化といじめ問題の台頭の2つ事柄は無関係ではないと関連性を指摘している。

同様に森田・清永(1986)は近年核家族化している現状によって家族成員が減り、痛みのわからない子、欲求耐性の低い子の増加していることがいじめ増加の一要因と考えられると、核家族化といじめの関連性について述べている。

これらのことは、家族成員がいじめ加害傾向に影響を与える可能性を示している。

家族関係においては、いじめ問題だけでなく、非行や様々な事柄の背景として関連が示されている。例えば、中村(2001)は、DLT(Doll Location Test)を使用して非行少年の家族イメージと一般の中学生の家族イメージを比較したところ、非行少年は一般中学生よりも人形を

置く距離が大きく、家族の親密性が低かったと報告している。相谷(2001)のFAST(Family System Test)による非行少年の家族システムについての調査では、非行時を想起しながら行った家族の親密性が低いことを述べている。

以上のように、いじめや非行など、様々な逸脱行為と家族関係は密接に関連しているということが種々の意見として少なくない。しかしながら、いじめ加害を生起させる要因として、いじめ加害傾向と家族関係を関連づけた研究はあまりなされてきていないのが現状である。特に、親密性についてはいじめ以外の逸脱行為との関連が示されているにも関わらず、検討されていない。そのため、家族機能を総合的に理解するためのツールとして円環モデルの凝集性と適応性に着目し、いじめ加害傾向と家族関係を関連づけて検討することは有用であると考えられる。また、両親の有無や兄弟姉妹の有無による加害傾向の差に着目した研究はないため、家族構成との関連を家族機能と合わせて検討することで、いじめ加害傾向と家族関係に関連があるかどうかをより詳細に検討できよう。

これまでいじめ問題は、主に小中高校で起こるものとされ、小学校から高校までがいじめ研究の対象とされてきた。また、大学生が対象であっても、過去にいじめ体験を想起させるというものがほとんどであった。しかし、四辻・瀧野(2003)の調査では、大学にいじめおよびいじめ類似行為があると回答した者は69%、四辻・瀧野(2011)では、いじめがあると回答した者は46%となっている。また、遊間(2014)は、頻度の低いものを含めると大学生におけるいじめは高確率で存在している可能性があると述べている。つまり、大学生の半数がいじめ行為の存在を感じており、大学においてもいじめが存在する可能性を肯定している。こういったことから、小中高生はもちろんのこと、大学におけるいじめについても適切な対応が求められているが、前述したように、大学生におけるいじめについての研究は非常に少ない。

小中高生のいじめについては、さまざまな観点から研究が行われ、いじめ加害についても調査がなされている。そういった研究では、性差について検討されたもの(岡安・高山, 2000; 国立教育政策研究所, 2013)や、実際の程度加害体験があるかということが示されている(森田・滝・秦・星野・若井, 1999)。大学生のいじめについては研究が少ないために、実際にいじめが起こる可能性はあるのかということが示されていない。そのために、大学生のいじめ研究が進まないという悪循環を生んでいるのではないだろうか。

以上より、①大学生におけるいじめ加害傾向を調査することによって、大学におけるいじめ加害傾向の実態を調べ、いじめ研究の必要性について検討する。②大学生におけるいじめ加害傾向と性格特性5因子との関連を調査することによって、いじめ加害者の性格上の特徴を明らかにする、③いじめ加害者傾向と家族機能との関連を調査することによって、いじめ加害傾向の背景となる家族機能について考察する。これらの3点について、大学生を対象とし、いじめ加害傾向(直接的・関係性)とBigFive尺度(和田, 1996)及び家族機能測定尺度(草田・岡堂, 1993)との関連を調べることによって明らかにする。大学生におけるいじめ加害傾向と性格特性及び家族機能との関連を調査することによって、大学生におけるいじめの実態を把握することにつながり、数少ない大学におけるいじめ研究に有用なデータを提供しうると考えられる。加えて、加害者に合わせた対応を考えていく上で有用なデータを提供できうる。また、いじめ加害傾向を形成する一要因が明らかになり、いじめの予防策を提供することにつながると考えられる。

Ⅱ. 方 法

2.1 調査対象者

調査対象者は埼玉県内の大学に通う学生1年～4年生計347名。性別の内訳は男性236名、

女性111名で(平均年齢21.79歳, SD=4.51)であった。

全回答者347名のうち、明らかな虚偽回答を含むと判断された回答やいじめ加害傾向を測る質問に回答していないもの、3項目以上に欠損が認められる回答者を除き、最終的に286名が有効回答者になった。有効回答者の性別の内訳は男性188名、女性98名で(平均年齢19.81歳, SD=1.63)であった。

2.2 調査時期および手続き

2014年10月に質問紙によって調査を行った。なお、講義時間内で10～150人の多数の参加者に対して同時に調査を実施する集団法をとった。質問紙は無記名式で、社会的望ましさによる測定誤差の防止として、調査題目はダミーのものをを用いた。回答時間については制限を設けなかった。

2.3 質問紙の構成

いじめ加害傾向を測定・分類するためいじめ加害傾向尺度(大西・吉田, 2010)を大学生用に修正したもの、性格特性を測定するためBigFive(和田, 1996)、家族機能を測定するため家族機能測定尺度(草田・岡堂, 1993)からなる質問紙を用いた。また、参加者の心理的負担の軽減を考え、デモグラフィック要因、家族機能測定尺度、BigFive、いじめ加害傾向の順で回答するように質問紙を構成した。回答に要する所要時間はおよそ10～15分であった。

A. いじめ加害傾向尺度

田中(2001)をもとに、大西・吉田(2010)が中学生を対象として作成した「直接的いじめ加害傾向」「関係性いじめ加害傾向」の2因子で構成された尺度に、大学生・大学院生20名程度の意見を加味し大学生用に修正を加えて使用した。5項目からなり、「しれないと思う」「あまりしれないと思う」「ときどきすると思う」「すると思う」の4件法での回答を求めた。本研究では、①社会的望ましさによる測定誤差を防止

するためダミー項目を加え、全7項目とした。②内容・言葉遣いを大学生用に修正した。③心理的負担を軽減するため、呈示順を調整した。以上3点について修正をして使用した。項目修正の過程については、「大学生のいじめとしてふさわしい内容か」「社会的望ましさの観点から、率直な回答が得られるか」などということに関して議論し、大学生・大学院生の意見を反映させて修正を加えた。

B. BigFive尺度

和田(1996)がゴフとヘイルブラン(1983)のAdjectiveCheckListをもとに邦訳し、作成した「情緒不安定性」「外向性」「開放性」「調和性」「誠実性」の5因子で構成された尺度。60項目からなり、「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「ややあてはまる」「どちらとも言えない」「あまりあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「まったくあてはまらない」の7件法での回答を求めた。

C. 家族機能測定尺度

オルソン(1985ほか)が作成したFICES IIIをもとに草田・岡堂(1993)が邦訳し、作成した「凝集性」「適応性」の2因子で構成された尺度。20項目からなり、「まったくない」「た

まにある」「ときどきある」「いつもある」の4件法で回答を求める。

D. デモグラフィック要因

性別、年齢、学年、居住形態(実家暮らし・一人暮らし・その他)、家族構成について回答を求めた。

Ⅲ. 結 果

3.1 大学生の加害傾向について

この節では、大学生の加害傾向の現状を性別や家族構成に着目して検討した結果を示す。

いじめ加害傾向尺度の項目ごとについている得点(1~4点)を因子ごとに加算し、直接加害傾向因子得点と関係性いじめ加害傾向因子得点を算出した。いじめ加害傾向の項目について表1に示す。

A. いじめ加害傾向尺度の項目別度数

加害傾向の質問項目1~5に対して、参加者が「しないと思う」「あまりしないと思う」「思う」「ときどき思う」「すると思う」のうちどのように回答したかの割合を示した(表2)。

項目1と5に関しては、「しないと思う」が50%前半にとどまり、「あまりしないと思う」

表1 いじめ加害傾向尺度項目

直接いじめ加害傾向因子
項目1. Cは友人から、気が弱く、いじめられキャラなDについて「いつもジュースや食事をおごってくれるよ」と聞いていました。そこで、CはさっそくDにジュースをおごってもらうことにしました。あなたがCなら、Cと同じようなことをすると思いますか
項目3. GはHをみているとイライラします。ある日、GはなんとなくHの持ち物を隠してしまいました。Hに無くした持ち物についてたずねられても、Gは知らないふりをして返しませんでした。そうすると、Gは気分がすっきりします。あなたがGなら、Gと同じようなことをすると思いますか
項目4. 同級生のIは成績が優秀で、必修授業担当の教授のお気に入りのようです。あるときJは、Iのレポートを見てコメントをしましたが、IはJを相手にしませんでした。腹を立てたJはIのあら探しをして馬鹿にするようになりました。あなたがJなら、Jと同じようなことをすると思いますか
関係性いじめ加害傾向因子
項目5. Aのサークル仲間のBはとても自分勝手なので、AはBが大嫌いです。そこで、Aは、B以外のサークルのメンバーに、「今後Bは遊びに誘わないようにしましょう」と提案しました。あなたがAなら、Aと同じようなことをすると思いますか
項目2. Eはサークル仲間のFにすごく嫌なことを言われ、激しく怒っています。そこで、EはFが見ていないSNSのグループ内で「Fがムカツクから、みんなで無視しよう」と発言しました。あなたがEなら、Eと同じようなことをすると思いますか

～「と思う」の回答が約半数を占めた。項目2, 3, 4については「しないと思う」の回答率が70%前後であり、項目1や5と比較すると「しないと思」っている学生が多かった。

B. 性別差・居住形態差

直接いじめ加害傾向、関係性いじめ加害傾向の高さに男女で差があるのか検討するために直接加害傾向因子得点、関係性いじめ加害傾向因子得点において男女でt検定を行った。

表2 項目ごとの回答選択率(単位%)

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5
しないと思う	54.2	69.6	70.3	63.6	54.2
あまりしないと思う	28	19.6	18.9	23.8	28.7
ときどきすると思う	11.9	8.7	8.7	10.1	12.6
すると思う	5.9	2.1	2.1	2.4	4.5

表3 直接いじめ加害傾向の性差

	直接いじめ加害傾向			
	n(人)	平均	SD	t値(自由値)
男性	188	4.92*	2.00	3.99
女性	98	4.09	1.46	254.11

*は5%水準で有意

表4 関係性いじめ加害傾向の性差

	関係性いじめ加害傾向			
	n(人)	平均	SD	t値(自由値)
男性	188	3.24*	1.43	2.39
女性	98	2.86	1.20	228.98

*は5%水準で有意

直接いじめ加害傾向因子得点に男女で差が見られ、男性の得点が有意に高かった(表3)。

同様に、関係性いじめ加害傾向因子得点にも男女で差が見られ、男性の得点が有意に高かった(表4)。

居住形態についてもt検定を行い、「その他」と「実家暮らし」「一人暮らし」との間に差が見られた。しかし、「その他」を回答した性別の比率として男性が多かったため、性別を含めた効果を検定するため、直接加害傾向因子得点・関係性加害傾向因子得点を従属変数、性別・居住形態を固定因子とした多変量分散分析を行ったところ、居住形態による効果は見られなかった。

C. 家族成員の差(直接いじめ加害傾向)

両親の有無によって、直接いじめ加害傾向の高さに差があるかどうか「あり群」「なし群」の2群に分け、得点の平均値の差についてt検定を行った結果、父親の有無による有意な差はなかった($t(284) = -0.036, n.s.$)。同様に母親の有無による差についてt検定を行ったが、差はなかった($t(284) = -0.041, n.s.$)。

また、兄弟姉妹その家族成員の有無によって直接いじめ加害傾向の高さに差があるのかそれぞれ「あり群」「なし群」でt検定を行った(図1)。兄の有無によって加害傾向に差は見られなかった($t(284) = 0.174, n.s.$)。しかし、姉

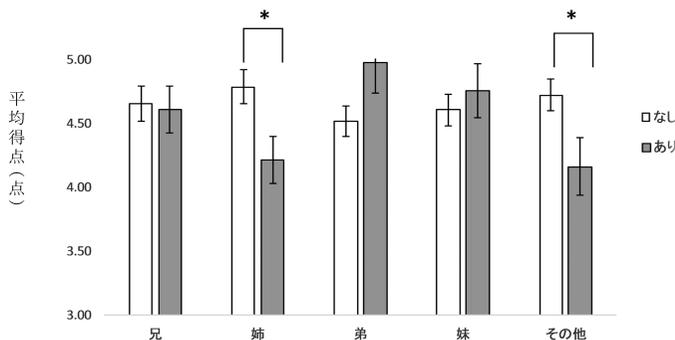


図1 直接いじめ加害傾向
(*は5%水準で有意。エラーバーは標準誤差)

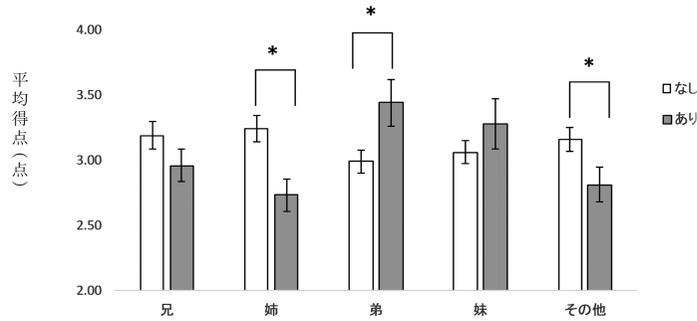


図2 関係性いじめ加害傾向
(*は5%で有意。エラーバーは標準誤差)

の有無による差は見られ、姉がいない方がいじめ加害傾向が有意に高かった ($t(157.16)=2.517, p<.05$)。弟の有無による差は見られなかった ($t(284)=-1.821, n.s$)。妹についても検定を行ったが、差は見られなかった ($t(284)=-0.553, n.s$)。その他の家族成員については差が見られ、その他の家族成員がいない方が有意に加害傾向が高かった ($t(70.62)=2.185, p<.05$)。また、その他の家族成員の内訳については「祖父母」と回答した参加者ほとんどを占めた。

D. 家族成員の差 (関係性いじめ加害傾向)

両親の有無によって、関係性いじめ加害傾向の高さに差があるかどうか「あり群」「なし群」の2群に分け、得点の平均値の差についてt検定を行った結果、父親の有無による有意な差はなかった ($t(284)=-0.612, n.s$)。同様に母親の有無による差についてt検定を行ったが、差はなかった ($t(284)=-1.541, n.s$)。

また、兄弟姉妹その家族成員の有無によって関係性いじめ加害傾向の高さに差があるのかそれぞれt検定を行った (図2)。

兄の有無によって加害傾向に差は見られなかった ($t(228.9)=-1.406, n.s$)。しかし、姉の有無による差は見られ、姉がいない方がいじめ加害傾向が有意に高かった ($t(177.01)=3.231, p<.05$)。弟の有無による差も見られ、弟がいる方がいじめ加害傾向が有意に高かった

($t(111.75)=-2.250, p<.05$)。妹についても検定を行ったが、差は見られなかった ($t(284)=-1.096, n.s$)。その他の家族成員については差が見られ、その他の家族成員がいない方が有意に加害傾向が高かった ($t(90.78)=2.175, p<.05$)。

3.2 加害傾向の大学生の特徴 (各群の比較から)

本研究では、いじめ加害傾向を持つ大学生の特徴を明らかにするためにいじめ加害傾向を持つ群、そうでない群に分け、各群を比較した。

A. 調査群の設定

本調査では、いじめ加害傾向尺度の得点によって、調査参加者を4群に分けた。直接加害傾向因子得点が7点以上の参加者を「直接加害傾向高群」、関係性加害傾向因子得点が5点以上の参加者を「関係性加害傾向高群」、直接加害傾向因子得点が7点以上かつ関係性いじめ加害傾向因子の得点が5点以上の参加者を「両高群」、直接加害傾向因子得点が7点に満たないかつ関係性加害因子得点が5点に満たない参加者を「低群」として4種類に分類した (図3)。高低の基準得点を決定するにあたっては、大学院生3名の意見を反映して定めた。

その結果、各条件の人数の分布は表5に示した通りになった。

B. BigFive尺度の処理

BigFive尺度は因子分析を行ったが先行研究とほぼ同じ因子構造が確認されたため、先行研

究どおりに「外向性」「情緒不安定性」「開放性」「誠実性」「調和性」の5因子に分けた。項目ごとについている得点(1~7点)を因子ごとに加算し、外向性因子、情緒不安定性因子、開放性因子、誠実性因子、調和性因子の各合計点を算出した。項目を表6に示す。

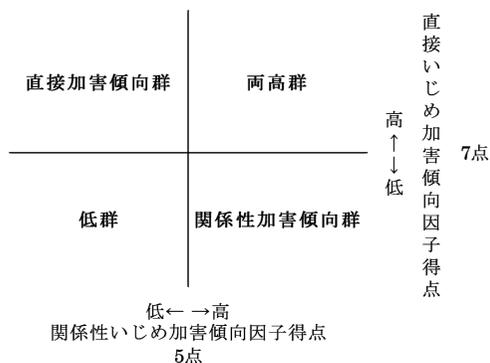


図3 群の分類

C. 家族機能測定尺度の処理

家族機能測定尺度は因子分析を行ったが先行研究とほぼ同じ因子構造が確認されたため、先行研究どおりに「凝集性因子」と「適応性因子」の2因子に分けた。項目ごとについている得点(1~7点)を因子ごとに加算し、凝集性得点と適応性因子を算出した。項目を表7に示す。

表5 加害傾向群別分布

	n (人)	男性 (人)	女性 (人)	平均年齢 (歳)	SD
両高群	28	23	5	20.32	2.18
直接加害傾向群	23	18	5	20.00	0.90
関係性加害傾向群	23	15	8	19.35	0.83
低群	212	132	80	19.78	1.66
計	286	188	98	19.81	1.63

表6 Bi g Five 尺度因子分け表 (*は逆転項目)

第1因子： 外向性	第2因子： 情緒不安定性	第3因子： 開放性	第4因子： 誠実性	第5因子： 調和性
1. 話し好き	2. 悩みがち	3. 独創的な	4. いい加減な*	5. 温和な
6. 無口な*	7. 不安になりやすい	8. 多才の	9. ルーズな*	10. 短気*
11. 陽気な	12. 心配性	13. 進歩的	14. 怠惰な*	15. 怒りっぽい*
16. 外向的	17. 気苦労の多い	18. 洞察力のある	19. 成り行きまかせ*	20. 寛大な
21. 暗い*	22. 弱気になる	23. 想像力に富んだ	24. 不精な*	25. 親切的な
26. 無愛想な*	27. 傷つきやすい	28. 美的感覚の鋭い	29. 計画性のある	30. 良心的な
31. 社交的	32. 動揺しやすい	33. 頭の回転の速い	34. 無頓着な*	35. 協力的な
36. 人嫌い*	37. 神経質な	38. 臨機応変な	39. 軽率な*	40. とげがある*
41. 活動的な	42. くよくよしない*	43. 興味の広い	44. 勤勉な	45. かんしゃく持ち*
46. 意思表示しない*	47. 悲観的な	48. 好奇心が強い	49. 無節操*	50. 自己中心的*
51. 積極的な	52. 緊張しやすい	53. 独立した	54. 几帳面な	55. 素直な
56. 地味な*	57. 憂鬱な	58. 呑み込みの速い	59. 飽きっぽい*	60. 反抗的*

表7 家族機能測定尺度因子分け表 (*は逆転項目)

第1因子:凝集性
13. 家族で何かをする時は、みんなでやる。
5. 私の家族は、みんなで何かをするのが好きである。
9. 私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている。
15. 私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく。
11. 私の家族は、お互いに密着している。
7. 家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている。
19. 家族がまとまっていることは、とても大切である。
17. 私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。
1. 私の家族は、困ったとき、家族の誰かに助けを求める。
3. 家族はそれぞれの友人を気に入っている。
第2因子:適応性
18. 私の家族では、みんなを引っ張っていく者(リーダー)が決まっている。*
20. 私の家族では、誰がどの家事・用事をするか決まっている。*
4. 私の家族は、子供の言い分も聞いてしつけをしている。
2. 私の家族では、問題の解決には子供の意見も聞いている。
14. 家族の決まりは、必要に応じて変わる。
8. 私の家族では、問題の性質に応じて、その取り組み方を変えている。
6. 家族を引っ張っていく者(リーダー)は、状況に応じて変わる。
10. 私の家族は、叱り方について親と子で話し合う。
16. 私の家族では、家事・用事は、必要に応じて交代する。
12. 私の家族では、子どもが自主的に物事を決めている。

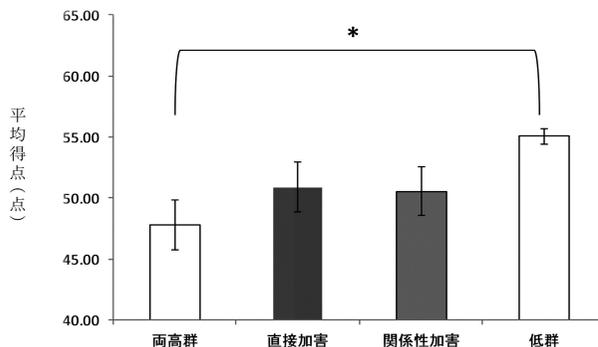


図4 調和性における平均値の差の検定
(*は5%で有意。エラーバーは標準誤差)

3.3 各群における性格特性の差 (BigFive の多変量分散分析の結果)

欠損値は33で、 $n = 253$ で解析を行った。有効回答者の内訳は、両高群20名(男性17名、女性3名)、直接加害傾向群19名(男性15名、女性4名)、関係性加害傾向群20名(男性13名、女性7名)、低群194名(男性118名、女性76名)であった。

各群の性格特性の相違について調べるために、BigFive尺度の外向性因子得点、情緒不安定性因子得点、開放性因子得点、誠実性因子得点、調和性因子得点の5つを従属変数、群要因

と性別の2つを固定因子とした多変量分散分析を行った。その結果、どの因子においても性別の主効果は見られず、群×性別の交互作用も見られなかった。そのため、性別の要因を加味せず外向性因子得点、情緒不安定性因子得点、開放性因子得点、誠実性因子得点、調和性因子得点の5つを従属変数、群要因を固定因子とした多変量分散分析を行った。その結果、調和性因子において群による主効果が見られ ($F(3,249) = 5.689, p < .05$)、多重比較を行ったところ、両高群は低群よりも有意に得点が低かった(図4)。調和性以外の4つの性格特性因子において

表8

	外向性			
	両高群	直接群	関係性群	低群
n	20	19	20	194
平均	53.40	50.79	52.65	55.20
標準偏差	6.23	9.31	12.93	11.50

表9

	情緒不安定性			
	両高群	直接群	関係性群	低群
n	20	19	20	194
平均	50.45	53.68	53.70	53.09
標準偏差	6.82	7.31	12.73	12.15

表10

	開放性			
	両高群	直接群	関係性群	低群
n	20	19	20	194
平均	53.10	49.74	51.95	51.10
標準偏差	9.12	9.57	10.90	10.15

表11

	誠実性			
	両高群	直接群	関係性群	低群
n	20	19	20	194
平均	43.65	43.63	46.50	46.25
標準偏差	7.44	4.90	12.27	7.78

表12

	調和性			
	両高群	直接群	関係性群	低群
n	20	19	20	194
平均	47.80	50.89	50.55	55.06
標準偏差	6.44	5.13	8.36	9.61

は有意な差は見られなかった。いずれの検定においても、等分散性の検定にはTurkeyの手法を用い、多重比較の調整にはBonferroniの手法を用いた。

各性格特性因子における群ごとの平均値は表8～表12に示した通りであった。

3.4 各群における家族機能の差（多変量分散分析の結果）

欠損値は13で、n = 273で解析を行った。有効回答者の内訳は、両高群25名（男性21名、

女性4名）、直接加害傾向群21名（男性16名、女性5名）、関係性加害傾向群21名（男性13名、女性8名）、低群206名（男性127名、女性79名）であった。

各群の家族機能の相違について調べるために、家族機能測定尺度の凝集性因子得点と適応性因子得点の2つを従属変数、群要因と性別の2つを固定因子とした多変量分散分析を行った。その結果、凝集性因子においても適応性因子においても群による主効果は見られなかった。また性別による主効果も見られなかった。さらに、群×性別の交互作用も見られなかった。しかしながら、適応性因子を従属変数、群と性別の2つを固定因子とした一変量分散分析を行った結果、男性においてのみ差が見られ（ $F(3,270) = 4.124, p < .05$ ）、多重比較を行った結果、関係性加害傾向群と両高群との間に差が見られた上に、直接加害傾向群とも有意な差が見られた（図5）。いずれの検定においても、等分散性の検定にはTurkeyの手法を用い、多重比較の調整にはBonferroniの手法を用いた。

凝集性因子、適応性因子の得点平均はそれぞれ表13・14の通りであった。

IV. 考 察

本調査では、大学生を対象とし、いじめ加害傾向（直接的・関係性）と性別などの要因、BigFive尺度（和田，1996）及び家族機能測定尺度（草田・岡堂，1993）との関連を調べることによって、大学生におけるいじめ加害傾向について調査し、大学におけるいじめ研究の必要性について検討した。また、大学生におけるいじめ加害傾向と性別や性格特性5因子との関連を調査することによって、いじめ加害者の性格上の特徴を明らかにし、いじめ加害者傾向と家族機能との関連を調査することによって、いじめ加害傾向の背景となる家族機能について考察した。

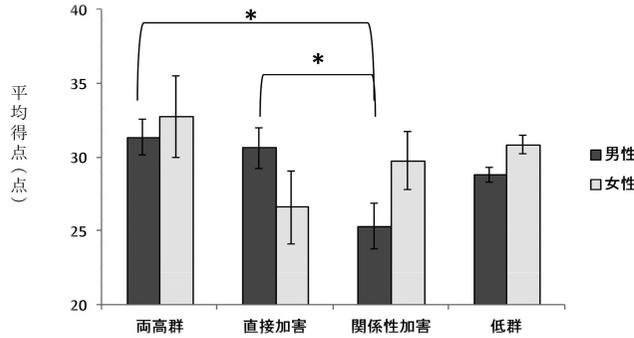


図5 適応性因子の平均値の差の検定
(*は5%で有意。エラーバーは標準誤差)

表13 凝集性因子得点平均

	凝集性							
	両高群		直接加害傾向群		関係性加害傾向群		低群	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
n	21	4	16	5	13	8	127	79
平均	31.86	32.5	30.94	24.6	25.77	31.13	28.07	30.82
SD	7.28	7.14	6.2	3.78	8.08	5.87	8.12	9.14

表14 適応性因子得点平均

	適応性							
	両高群		直接加害傾向群		関係性加害傾向群		低群	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
n	21	4	16	5	13	8	127	79
平均	31.33	32.75	30.63	26.6	25.31	29.75	28.8	30.82
SD	3.61	3.95	4.29	3.71	5.15	4.56	4.98	6.97

4.1 大学生のいじめ加害傾向

本章では、大学生におけるいじめ加害傾向の現状について、生じやすいいじめのタイプ、また、性別差や居住形態、家族構成などに着目して検討する。

A. 大学生特有のいじめについて

結果の章3.1より、「Cは友人から、気が弱く、いじられキャラなDについて「いつもジュースや食事をおごってくれるよ」と聞いていました。そこで、CはさっそくDにジュースをおごってもらうことにしました。あなたがCなら、Cと同じようなことをすると思いますか」という直接加害傾向を測る質問項目（以下、項

目1）に対して「しないと思う」と回答した参加者は54%と、半数程度にとどまったという結果が得られた。したがって、残りの約半数の学生が「たまにする」のか「高頻度でする」のかといった程度の差は生じても「気の弱い相手に物をおごらせる」といったいじめ行為をする可能性があるということが示唆された。また、「Aのサークル仲間のBはとても自分勝手なので、AはBが大嫌いです。そこで、Aは、B以外のサークルのメンバーに、「今後Bは遊びに誘わないようにしよう」と提案しました。あなたがAなら、Aと同じようなことをすると思いますか」という関係性加害傾向を測る質問（以下、項目5）では「しないと思う」の回答率は

同様に54%であり、残りの約半数の学生が「SNSを使用して相手をコミュニティから排除し、自分の近辺に近づけない」というタイプのいじめをしやすいことが示唆された。その他の質問項目では70%前後は「しないと思う」を回答していることから、大学生においては大半がこういった行為をすることは少ないが、30%程度の学生はする可能性があると考えられる。以上より、昨今の大学生においては「他者に金銭を支払わせる」「SNSといった手段を用いて仲間はづれにする」といったタイプのいじめが特に発生しやすいということが推測される。

項目1に関して、「あまりしないと思う」～「すると思う」の回答率が高い理由については、自分のために他者に金銭を払わせることを「いじめ」と捉えていない、もしくは「いじめ」という認識はあっても金銭を払わせることを強要しても相手に苦痛に感じさせる行為ではない（「いじめ」として程度が軽い）と考えている、ということが推測されるのではないだろうか。大学生という年代においては、高校生までの年代と異なりアルバイトなどをして親から独立した収入を得ることが可能で、一般的に比較的自由に金銭を使用できる学生は多いと思われる。そのため金銭に関して無頓着になりがちであるということが、このタイプのいじめが多い根本的な理由として考え得る。

項目5に関しては、大学生は高校までの決定された避けられない人間関係と異なり、自分で関わる人間を選択することが出来る環境は影響していると考えられる。嫌だと思ふ対人関係を避けることが可能であるために、自分が嫌だと思ふ人物を「仲間に入れない」「自分が属す集団内から排除する」ということでその対人関係を回避しようとする傾向があると推察される。同じSNSを使用して周囲に働きかける形を取る「Eはサークル仲間のFにすごく嫌なことを言われ、激しく怒っています。そこで、EはFが見ていないSNSのグループ内で「Fがムカツクから、みんなで無視しよう」と発言しました。あなたがEなら、Eと同じようなことをすると

思いますか」という質問項目との間に若干の差が出た理由に関しては、以下のように推察した。前述したように、大学生は高校までの決定された避けられない環境（クラスや担任、授業など）と異なり、人間関係を選択することが出来るため、自分が嫌だと思ふ人物を回避することが出来るという前提がある。しかし、選択の自由があることは周りの他者にも言えるため、人間関係について「誰と仲良くする」といったことを強要することは出来ないために「無視しよう」と周りに提案する項目2のようないじめは項目5と比べるとあまり生じしないのではないかと考えられる。

B. 大学生のいじめ加害傾向の性差と居住形態

直接加害傾向の高さにおいて、男性の加害傾向が高いことがわかった。このことから、大学生においては男子学生の方が「物をおごらせる」「馬鹿にする」などの直接的な形で相手にいじめのアプローチをしやすいことが考えられる。加えて、関係性加害傾向においても男性の方が加害傾向が高いという結果から、「周りのネットワーク」を使用してのいじめを女子学生よりもしやすいということが考えられる。これらの結果から、直接いじめ、関係性いじめといったいじめの形態に関わらず、男子学生の方がいじめ加害者になりやすいことを示唆している。いじめ加害の性差について言及している先行調査（岡安ら、2000；国立教育政策研究所、2013）では、「殴る、蹴るといった暴力」「からかう、悪口」などの直接的ないじめは男子に多く、「無視する」といった関係性のいじめは女子に多いとされてきた。しかしながら、本調査においては、直接的いじめ傾向も関係性いじめ傾向も共に高いという結果が示され、女性の方が関係性いじめをしやすいという意見と矛盾している。この点において、小中高生までのいじめと大学生のいじめの差異が見られた。小学生などにおいてはいじめの加害傾向に性差が見られるにも関わらず、本研究においてはいずれの加害傾向においても男性の方が高かった理由と

しては、女性は年齢が上がるにつれていじめに関わりにくくなっているのではないかということが考えられる。つまり、小学生時代は仲間はずれにするということを積極的にしている女子が多かったが、大学生になってまではしないという女性が多いということが推測される。

また、居住形態に関しては有意な差が見られなかった。したがって、家族と同居しているか離れて過ごしているかということはいじめ加害傾向に対して影響しないと考えられる。*t*検定において「その他」の居住形態と「実家暮らし」「一人暮らし」との間に差が見られた理由としては、「その他」の居住形態を回答した性別の比率が男性の方が高い傾向にあったということが推測される。

C. 大学生におけるいじめと家族構成との関連

家族構成によって、いじめ加害傾向に差が生じるのか検討する。加害傾向の高さにおいて、両親や兄弟姉妹の有無によって差が生じるか t 検定を行った結果、一人っ子や姉以外のきょうだいいない参加者や「その他」の家族成員(主に祖父母)がいない参加者は直接加害傾向・関係性加害傾向ともに高く、逆にきょうだいに弟がいる参加者は一人っ子や弟以外のきょうだいいない参加者と比較して関係性加害傾向が高いことが示唆された。つまり、きょうだいに姉が含まれることや祖父母が同居していることはいじめ加害の抑止につながり、逆にきょうだいに弟がいることは関係性いじめ加害を助長するということと言える。男兄弟と比較すると、姉や祖父母という存在は、優しい存在であると捉えていると考えられ、日ごろから、そういった家族成員が「優しい人」のモデルとして存在していることがいじめ加害の抑止につながっていると推測される。逆に、下に男兄弟がいることは「自分よりも立場の弱い者になら多少意地悪をしてもかまわない」といった心理が働き、日常化してしまっていると考えられる。そのため、家庭において「自分よりも弱い立場」が存在することが、関係性いじめ加害傾

向を助長するということが推測される。妹という「自分より弱い立場」がいることによって、その傾向が見られないのは「妹は女性であるため、庇護すべき存在である」と捉えており、弟と比較すると家庭内で丁寧に対処することが多いということが考えられる。

以上のことは、育てられた家庭環境によって培われた対人関係のあり方が友人関係などでも体現されるという可能性を示しており、いじめ加害傾向に影響を与える可能性があることを示唆している。

D. 大学生におけるいじめ加害傾向高群の分布について

いじめ加害傾向の群わけの結果、有効回答者286人中、両高群28名、直接加害傾向群23名、関係性加害傾向群23名と高い加害傾向を持った参加者は74名であった。このことから、30%弱の大学生が加害傾向を持っていることが示唆された。森田ら(1999)の「小学校及び中学校のいじめによる加害者と被害者の重なり」によれば、いじめ加害のみ経験したと回答した「加害のみ群」は小学生で12.1%、中学生で10.9%であった。本調査では、加害体験でなく、加害傾向を測定しているため、傾向を持ったものがどれほどの確率で行動に移すかによるが、30%弱の参加者は加害傾向が高いという結果には、十分に大学においていじめが生じる可能性があることを示唆している。

4.2 いじめ加害傾向と性格特性(各群の性格上の特徴について)

本節では、直接的な加害行動をしやすいとされる「直接いじめ加害傾向群」、対人関係に働きかける加害行動をしやすいとされる「関係性いじめ加害傾向群」、両方のいじめ加害傾向が高いとされる「両高群」、いじめ加害傾向が低い「低群」のいじめ加害傾向の4つのタイプがどのような性格の傾向を示すかという性格特性について、各群を比較した結果から考察する。

どの性格特性においても男女差は見られず、

いじめ形態（直接いじめ・関係性いじめ）との交互作用も見られないという結果が得られた。このことから、「この群の女性はこういう性格だが、男性はむしろこういう性格である」例えば、「直接加害群の女性は誠実性が低い、一方で男性は外向性が強い」といった、性別要因といじめ加害のタイプが合わさることによる特徴は見られないと言える。

分散分析の結果、両高群は低群と比較して調和性が低いということが示唆された。調和性は「どれだけ周囲と協力しあえるか、穏やかな性格か」という特性であり、「温和かどうか」「短気でないか」「怒りっぽくないか」「寛大かどうか」「親切であるか」「良心的であるか」「協力的であるか」「とげがないか」「かんしゃく持ちではないか」「自己中心的ではないか」「素直であるか」「反抗的ではないか」ということが要素に含まれる。このことから、直接いじめ加害傾向と関係性いじめ傾向の2つを併せ持つ参加者はいじめに加担するリスクの低い参加者と比べて、「温和でない」「親切心に欠ける」「怒りっぽい」「自己中心的である」「反抗的」といった性格上の特徴があるということが示された。また、協調性の特性因子は周囲の人に同調性やすく自分の意志がないといったネガティブな側面も含まれるため、加害傾向が高い人は意志がかたく他者に同調されにくい傾向があると考えられる。

速水（2011）によれば、いじめ加害傾向の高さと密接に関連するとされる仮想的有能感・自尊感情の高さといった特性は「情緒不安定性」と相関関係にあると報告されているが、本調査では、他群と比較して、両高群の情緒不安定得点が若干高かったものの、加害傾向が高いとされる3群のどれとも低群との有意な差は見られなかった。このことは、小中高生までのいじめが自己が持つ不安感のためにいじめという行動に至るといった可能性が考えられていたのとは異なり、大学生においては不安感がいじめ加害傾向に影響を及ぼす可能性が低い傾向にあるということを示唆している。

また、有意な差は認められなかったが、両高群と直接加害傾向群は関係性高群や低群よりも誠実性の得点が微小な差ではあるものの低いという傾向が表11から読み取れる。したがって、直接的いじめ加害の傾向が高い参加者は誠実性が低い、つまり「不真面目」という性格の傾向がある可能性が示されたと言える。

本章では、いじめ加害傾向の高い参加者は「調和性が低い」という特性を明らかにした。この結果は、加害に性格が影響する可能性が十分あるとする遊間（2014）の主張と合致するものである。本研究では、いじめ加害においては性格といった個人的資源が影響している可能性があるという見解を裏付ける結果が示唆された。

4.3 いじめ加害傾向と家族機能（各群の家族機能上の特徴）

本節では、直接的な加害行動をしやすいとされる「直接いじめ加害傾向群」、対人関係に働きかける加害行動をしやすいとされる「関係性いじめ加害傾向群」、両方のいじめ加害傾向が高いとする「両高群」、いじめ加害傾向が低い「低群」のいじめ加害傾向の4つのタイプがどのような家族機能であるかについて、各群を比較した結果から考察する。

分散分析の結果、凝集性については群によって違いがないということが示された。このことから、家族の情緒的なつながりが強いかなにかについてはいじめ加害傾向が高い参加者も低い参加者も違いがないということが言える。つまり、家族が密着性に強い密接な関係を築いているかなにかや情緒的なつながりが強いかなにかということはいじめ加害行動をするかどうかに影響が少ないということが考えられる。

また、適応性においては男性の参加者のみ両高群と関係性加害傾向群、直接加害傾向群と関係性加害傾向群に差が見られ、関係性加害傾向群の男性は他のいじめ傾向を持つ男性参加者よりも家族の適応性が低いということが示された。つまり、本調査においては、男性は家族が

物事に臨機応変に対応できる能力が低いことが関係性いじめ加害の高さにつながるが、女性の場合には家族が物事に臨機応変に対応できているにも関わらず関係性いじめ加害傾向が高くなるという傾向が見られた。女性についてはどの群間にも差が見られないということから、関係性いじめ加害傾向が高まる要因が男性は家族の環境に起因しているということが考えられるが、女性は家庭環境がいじめ加害傾向の高さの要因にはならず、男女で根本的に要因が異なる可能性がある。また、男性は家庭で築かれた対人関係のあり方が忠実に外での対人関係に反映される傾向が強いが、女性の場合は家庭とそれ以外での対人関係のあり方がそのまま反映されるわけではないということが示された。さらに、適応性においては直接加害傾向群のみでなく、関係性加害傾向群と同様に関係性いじめ加害の傾向が高い両高群とも差が見られたことから、直接加害傾向が高い群の方が適応性の高さが高いと推測され、家族の適応性の高さと直接いじめ加害傾向の高さは関連している可能性があると考えられる。

4.4 まとめ

考察の章1のAで述べたように、大学生に生じやすいタイプのいじめが存在すること、いじめの種類によっては半数程度の学生が加害傾向を示すことが示唆された。また、大学生の間で生じやすいと考えられるいじめについて、小学生から高校生までとは異なった大学生特有の金銭感覚や対人における距離の取り方が影響していると推測される。

1のBでは、相手に直接的ないじめ行動を示すとされる直接いじめ加害の傾向も周囲の人間関係に働きかけて間接的ないじめ行動を取るとされる関係性いじめも男子学生の方がその傾向が強いということが示された。小中学生の年代においては、直接的ないじめ加害は男子が多く、関係性のいじめ加害は女子に多いとされてきた。しかしながら、本調査においては、直接的いじめ傾向も関係性いじめ傾向も共に高いと

いう結果が示され、女性の方が関係性いじめをしやすいという意見と矛盾している。この結果に関しては、女性は年齢が上がるにつれていじめ加害傾向が低下していく傾向にあるということが推測される。

1のCのいじめ加害傾向と家族構成について述べた項では、家族成員に姉や祖父母がいることが直接いじめ加害、関係性いじめ加害の抑止になっている可能性が示唆された。また、逆に弟がいると関係性いじめ加害を助長させる可能性があることが示された。このことから、家族成員に姉や祖父母のような「優しい人」のモデルがいることが加害傾向を抑止し、逆に弟のような「自分より弱い立場であるが、庇護する必要性があまりない存在」がいることが関係性いじめ加害を助長させることが示された。

さらに、1のDでは、3割近くの参加者はいじめ加害傾向が高いということが示唆された。小中学生のいじめ加害体験率と比較してみると、大学においても十分にいじめが生じる可能性があると言える。1のAの結果も含めた結果から、大学内では小中高生とは質の異なる、大学生特有のいじめが生じる可能性があると考えられ、大学におけるいじめが小中高生までのいじめと比較して「起きづらい」ということは一概には言えない。

考察の章2の節にて、群と性別の交互作用が否定されたことから、性別による違いは特になんないということが言える。性別といじめ加害傾向が合わさることによる性格の差は見られなかったため、大学生においては「男性はこういう性格だから、こういういじめをする」「女性はこういう性格だから陰険ないじめをしやすい」という傾向が薄いということが言える。そのため、「女性の多い職場では陰口が多い」といった、その性別特有のいじめの仕方、性別によって関わりやすいいじめのタイプが異なるといったこと一般的に述べられてきたが、大学生においてはこういった性別の要因はあまり重要視されない可能性がある。加えて、考察の章2の節では、直接いじめ加害傾向と関係性いじめ傾向

の2つを併せ持つ参加者はいじめに加担するリスクの低い参加者と比べて、「温和でない」「親切心に欠ける」「怒りっぽい」「自己中心的である」「反抗的」といった性格上の特徴があるということが示された。以上の結果は、雨宮ら(2011)がいじめ加害と怒りの特性との関連性を示した意見を支持するものとなり得る。また、本調査で示唆された加害者傾向の高い者は「自己中心的」な性質を持っているという結果は、鈴木ら(1993)の、一般的に加害者側の特性について「わがまま」といった認知をしやすいという結果と通じるものであり、いじめ加害者特性についての一般的な認知と実際の加害者の持つ特性が一致しているということが示唆された。以上のことは、いじめ加害者特有の性格特性が存在し、いじめの要因となりうるという意見を支持する。

家族機能については、凝集性には差が見られず、家族が親密か否かはいじめ加害傾向にあまり影響がないことが示唆された。適応性においては、直接的加害傾向・関係性加害傾向の両方が高い参加者や直接加害傾向のみが高い参加者よりも関係性加害傾向のみ高い参加者の方が、家族が臨機応変にものごとに対応できるかという機能が低かった。また、この特徴は男性のみに見られるもので、女性参加者に関しては適応性の違いは見られなかった。このことから、家族の適応性の良い男性参加者は直接加害傾向が強まり、適応性が悪いと関係性傾向が強まるといった傾向が示唆された。一方で女性においては適応性の良し悪しがいじめ加害傾向に及ぼす影響が少ないことが示され、関係性いじめ傾向を高める要因が他にあることを示唆した。しかしながら、1のCの結果を含めて検討すると、いじめ加害傾向に家庭環境の要因が関係しているという可能性は否定できない。

本調査では、大学生を対象とし、いじめ加害傾向について調査することによって、大学におけるいじめ加害傾向の実態を調べることによ

て、研究の必要性について検討した。また、いじめ加害傾向と性別や性格特性5因子との関連を調査することによって、いじめ加害者の性格上の特徴を明らかにし、いじめ加害者傾向と家族機能との関連を調査することによって、いじめ加害傾向の背景となる家族機能について考察した。しかしながら、単一の大学での調査であったことなどから、一概に一般化は出来ない。

V. 今後の展望

本調査の問題点および今後の課題については以下の通りである。

まず、本研究で得られた男性の方が女性よりも加害傾向が高いという結果から、大学生という年代の女性においては男性よりも社会的望ましさを重視している可能性を考慮した研究デザインを考える必要があること。

次に、母集団として父親や母親がいない参加者の人数が微小である上に参加者の出生順や兄弟姉妹の人数など細かい検討が行われていなかったために、家族構成による加害傾向の差を検討するには、妥当な検討であったかどうか不明であること。

さらに、本研究は、単一の大学内における限られた学部の学生に行った調査であるため、母集団の特性に偏りがあったといえる。

以上から、今後はさらに調査規模を広げてデータを収集した上で、より詳細な分析をする必要がある。

付 記

本論文を完成させるにあたり、2年間ご指導いただきました小田切紀子先生に心より感謝申し上げます。また、副査の田中信市先生や貴重な講義のお時間を本調査のためにさいてくださった諸先生方、並びに、調査にご協力いただいた皆様方にも心からの感謝を申し上げます。

引用・参考文献

- 相谷 登 (2001). 家族システムと非行についての考察——Family System Testの活用—— 調研紀要 71, 21-47.
- 雨宮俊彦・水谷聡秀 (2011). 小中高等学校時代におけるいじめの加害体験・被害体験と大学生の嘲笑嗜好・嘲笑恐怖との関連について, 20, 17.
- 速水敏彦 (2011). 仮想的有能感研究の展望 教育心理学年報 50, 176-186.
- 廣井亮一 (2002). 子供の攻撃性に関する一考察——少年非行の現状を通して—— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 12, 137-149.
- 加野芳正 (2011). なぜ、人は平気で「いじめ」をするのか? 透明な暴力と向き合うために 日本図書センター
- 蔵永 瞳・片山 香・樋口匡貴・深田博巳 (2008). いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響 広島大学心理学紀要, 8, 41-51.
- 小林美津江 (2013). いじめ防止対策推進法の成立 参議院調査室作成資料 立法と調査, 344, 24-35. http://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou_chousa/backnumber/20130903.html (平成25年9月3日更新)
- 国立教育政策研究所 (2013). いじめ追跡調査2010-2012 いじめQ&A https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2507sien/ijime_research-2010-2012.pdf (2014年12月2日取得)
- 草田寿子・岡堂哲雄 (1993). 家族関係査定法 岡堂 (編) 心理検査学 垣内出版 p.573-581.
- 草田寿子 (1995). 日本語版FACESⅢの信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, 28, 154-162.
- 松本麻友子・山本将志・速水敏彦 (2009). 高校生における仮想的有能感といじめとの関連 教育心理学研究, 57, 432-441.
- 森田洋司・清永賢二 (1986). いじめ 教室の病 金子書房
- 森田洋二・滝 充・秦 政春・星野周広・若井彌一 (1999). 日本のいじめ予防・対応に生かすデータ集 金子書房
- 中村 薫 (2001). 非行少年の人間関係についての考察——Doll Location Testの活用—— 調研紀要, 71, 1-19.
- NHK WEBニュース (2013). 学校が確認のいじめ 19万8000件超で過去最多 <http://www3.nhk.or.jp/news/html/20131210/k10013725051000.html> (2013年12月11日更新)
- 尾木直樹 (2007). いじめとどう向き合うか 岩波ブックレットNo.695 岩波書店
- 岡安孝弘・高山 巖 (2000). 中学校における被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- 大西彩子・吉田俊和 (2010). いじめの個人内生起メカニズム——集団規範の影響に着目して—— 実験社会心理学研究, 49, 111-121.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 (1993). 「いじめ—いじめられ」の場の認知 いじめへの態度と「いじめ—いじめられ」の場における学級の雰囲気と当事者の特性の認知 熊本大学教育学部紀要, 42, 229-245.
- 滝 充 (1992). “いじめ”行為の発生要因に関する実証的研究——質問紙法による追跡調査データを用いた諸仮説の整理と検証—— 教育社会学研究, 50, 366-388.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いたBigFive尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.
- 和田さゆり (1998). 性格の5因子モデル 佐藤達哉 (編) 現代のエスプリ 至文堂 p.193-202.
- 四辻伸吾・瀧野揚三 (2003). 大学生のいじめ観 (I) 大阪教育大学紀要, 51, 309-320.
- 四辻伸吾・瀧野揚三 (2011). 大学生のいじめ観 (II) 大阪教育大学紀要, 60, 91-109.
- 遊間義一 (2014). 大学生におけるいじめの加害・被害行為の継続性と流動性 犯罪心理学研究, 52, 17-30.